

# メキシコにおけるトマト生産<sup>1</sup>

—NAFTA 後の変化を中心に—

谷 洋之(上智大学外国語学部)

## 1. 本報告のねらい

北米自由貿易協定 (NAFTA) が構想されてから 20 年あまり、発効から数えても 17 年あまりが経った。当初から「先進国と途上国の経済統合」として注目を集め、その是非をめぐっては賛成・反対双方の立場から活発な議論が戦わされた。なかでも農業部門は、世界最大の穀物輸出国であるアメリカ合衆国と、トウモロコシの原産地のひとつであり長きにわたりそれを主食としてきながら 1970 年代以降その大規模輸入国に転落したメキシコとの間で貿易自由化が目指されたという意味で、論争がきわめて活発化した領域であったし、農業条項の見直しを求める運動は発効後もたびたび繰り返されている。NAFTA は 1980 年代の対外債務危機を契機に本格的に導入されたいわゆる新自由主義的構造改革を固定化する側面を有していたが、そのような経済戦略モデルを完全に否定し去ろうとする論も展開されている (吾郷[2010])。

「主食」として位置づけられたトウモロコシをはじめ農畜産物の対米輸入は NAFTA 後に激増した。TPP 締結の是非をめぐる議論の中でコメを含む農畜産物の輸入自由化を迫られている日本の文脈に即し、メキシコは「主食をアメリカに依存する」ようになったという捉え方もなされている (鈴木・木下[2010: 147])。たしかに疲弊した農村からは多数の住民が大都市圏や米国へと流出し、過疎化も進行している。しかしながら、輸入される米国産トウモロコシは「主食」として消費されているわけではないし、農村の疲弊や過疎化は必ずしも NAFTA を契機としているわけでも、またメキシコ全土であまねく起こっているというわけでもない。

NAFTA のような制度がいわば「与件」として導入された (あるいは導入されてしまった) ときに、果たしてミクロの生産・流通主体は手を拱いているしかないのであろうか。ともすると「NAFTA 悪玉論」は、そうした主体の「主体性」を矮小化し、彼らを政策の客体という立場に無理矢理押し込めることになるのではないか。本報告はこのような考え方に立ち、メキシコ中西部ハリスコ州で展開している野菜生産の変化の模様を描こうとするものである。もちろんこのような動向もメキシコ全土であまねく起こっているわけではない。また NAFTA が固定化した経済モデルを全面的に称揚しようとするものでもない。わが国にあってはあまり注目されることのない現代メキシコ農業部門のポジティブな側面を描くことで、バランスの取れた「メキシコ農業像」を形成する一助とすることが本報告の目的である。

## 2. メキシコにおけるトマト生産

### 2.1 前史

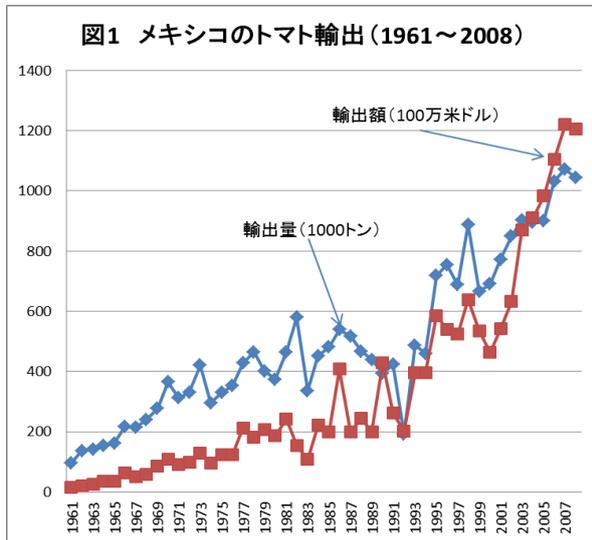
- \* 起源は 19 世紀末のシナロア州、米国からの鉄道の延伸 (1907) により対米輸出が盛んに
- \* 1960~70 年代に対米輸出が大きく伸びる：新品種、技術革新
- \* 1990~2000 年代にも大きな伸び：新品種、技術革新、制度変更 (「政府の退却」、NAFTA 発効)

---

<sup>1</sup> 本報告は、谷 [2005, 2007, 2008, 2010] を基本にしつつ、その後の知見も織り交ぜながら構成したものである。

## 2.2 NAFTA 後の変化

- \* 政府の退却：投入財，金融，水利への補助金カット→生産の集約化・寡占化／生産地の広域化
- \* NAFTA 発効：季節ごとに異なる自由化のペース→対米輸出の通年化
- \* 技術革新：点滴灌漑，水耕栽培，温室→生産物の高付加価値化



(出所) FAOSTAT

## 3. メキシコ農業におけるハリスコ州の位置づけ：シナロア州との対比において

\* 「メソアメリカ」と「アリドアメリカ」

- ・メソアメリカ——いわゆる「古代文明」揺籃の地：人口稠密，伝統的文化の存在
- ・アリドアメリカ——かつては非定住型先住民が優勢：人口密度低い「人工的」空間



\* 生産面のメリット

- ・標高 1000～1500 メートル，温暖な気候（年間平均気温 22℃）

- ・豊富な労働力

＊流通面のメリット

- ・グアダハラハラ都市圏（人口規模でメキシコ第2位）が近接：大きな消費市場
- ・比較的整備された輸送インフラ

#### 4. 温室トマト生産の伸張と地域社会への貢献

＊アグロスル社(トゥクスカクエスコ市)の事例

- ・温室トマト専業の生産企業：1996年創業，生産規模22ヘクタール（2006年）
- ・米国テキサス州マクアレンに販売会社を設立，米加のチェーンストアに販売
- ・冬期は輸出市場，夏期は国内市場に主に出荷
- ・特徴的な労務管理：日給制からノルマ制へー「伝統的」生活との調和

＊「ターンキー型温室農業」は地域発展に貢献できるか

- ・温室，管理システム，投入財はほとんどが輸入品：後方連関には乏しい
- ・輸出市場＋大都市市場への生鮮出荷：前方連関にも乏しい
- ・最大の貢献は雇用創出：「地元で働く権利」

#### 5. 地元資本の新たな挑戦：多角化・地元貢献・エコ

＊クエト・プロデュース社(サユラ市)の事例

- ・温室（パプリカ）と露地栽培（ブロッコリーと種子用トウモロコシの輪作）の組み合わせ
- ・独自ブランド形成への挑戦と請負生産
- ・近隣から徒歩通勤してくる従業員
- ・アグリパーク構想

#### 6. 結語

- ＊NAFTAがメキシコ農業に大きな衝撃をもたらしたのは間違いないが，その一方でNAFTAを逆手に取って成長を遂げた生産者も存在する。
- ＊そのようなミクロな利益は，必ずしも域内連関の創出という形ではマクロな利益に結びつかなかったが，域外への人口流出が顕著であった地域における雇用の創出には結びついた。
- ＊企業としての成功を「地域づくり」に結びつけようという構想を持つ経営者が現れ始めている。
- ＊本報告はハリスコ州という一地域で見られている事例であり，メキシコ全土で起こっているとは断言できないし，また同国の文化的歴史的多様性に鑑みると，同じようなことが全土で起こることが望ましいのかどうかも慎重に検討する必要がある。

#### 参考文献

<日本語文献>

- ・吾郷健二[2010]『農産物貿易自由化で発展途上国はどうか：地獄へ向かう競争』明石書店。
- ・鈴木宣弘，木下順子[2010]『食料を読む』日経文庫。
- ・谷 洋之[2005]「産地・企業・国家とグローバル化：『米墨トマト戦争』に見る NAFTA の諸相」泉，松尾，中村編『グローバル化する世界と文化の多元性』上智大学出版。
- ・\_\_\_\_\_ [2007]「拡大するメキシコの温室トマト輸出と地域発展の可能性」『ラテンアメリカ・レポート』（アジア経済研究所）Vol. 24, No. 2。

- \_\_\_\_\_ [2008] 「NAFTA を逆手に取る：メキシコ・ハリスコ州におけるトウモロコシ・トマト生産の事例から」 谷，グローブ編『トランスナショナル・ネットワークの生成と変容：生産・流通・消費』（「地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書」第2巻）上智大学出版。
- \_\_\_\_\_ [2010] 「高付加価値農産物の輸出を梃子に過疎地を甦らせる：メキシコにおける温室トマト産業」 田中，小池編『地域経済はよみがえる：ラテン・アメリカの産業クラスターに学ぶ』（『失われた10年』を超越して：ラテン・アメリカの教訓」第2巻）新評論。

< 欧語文献 >

- Barrón, María Antonieta [1997] *Empleo en la agricultura de exportación en México*, México: Juan Pablos.
- \_\_\_\_\_ y Fernando Rello [2000] “La agroindustria del tomate y las regiones pobres en México”, *Comercio Exterior*, 50:3.
- Cook, Roberta and Linda Calvin [2005] “Greenhouse Tomatoes Change the Dynamics of the North American Fresh Tomato Industry,” *Economic Research Report*, No. 2 (“Electronic Report from the Economic Research Service”), U.S. Department of Agriculture.
- Lara Flores, Sara María [1998] *Nuevas experiencias productivas y nuevas formas de organización flexible del trabajo en la agricultura mexicana*, México: Juan Pablos.
- Oeidrús Jalisco [2007] *Análisis comercial de los cultivos de chile, jitomate y sandía en el Estado de Jalisco*, Guadalajara: Oeidrús Jalisco.